

# 高瀬川だより

NPO法人京都高瀬川繁栄会会報  
編集人 田村佐起三

〒604-1800-1  
京都市中京区木屋町通三条上ル  
電話 (075) 222-1181

## 《日本丸の行方は？日米関係は？》

沖縄県翁長知事は生前「日本国憲法の上に日米地位協定があり、国会の上に日米合同委員会がある」と指摘。「それが、日本が米国に従属する根源である」と言い残された。

「TVそこまで言つて委員会です」米国の元海兵隊政務外交部長ロバート・エルドリッチ氏、ニューヨーク弁護士ケント・ギルバート氏、AP通信社平壤支局エリック・タルマジ氏等の意見としてケント・ギルバート氏は「日本国が成すべきことは①憲法改正②自主独立③日米安全保障条約破棄」を提言されその上で「近隣諸国と安全保障条約を締結の上日米安全保障条約を再度締結すべき」と提言された。また同氏は「トランプ大統領に「尖閣諸島が侵略されたら？」と質問すると大統領は「米国は後ろでちゃんと立っている」と回答された」と話された。

## 京都国立近代美術館 《没後50年 藤田嗣治展》

10月19日～12月16日

明治半ばの日本で生まれ、80年を超える人生の約半分をフランスで暮らし、晩年にはフランス国籍を取得して欧州の土となった画家・藤田嗣治(レオナルド・フジタ)。2018年はエコール・ド・パリの寵児のひとりであり太平洋戦争期の作戦記録画でも知られる藤田が世を去つて50年目にあたります。この節目に日本はもとよりフランスを中心とした欧米の主要な美術館の協力を得て画業の全貌を展覧する大回顧展を開催します。本展覧会は「風景画」「肖像画」「裸婦」「宗教画」などのテーマを設けて最新の研究成果も盛り込みながら、藤田芸術をとらえ直そうとする試みです。藤田の代名詞ともいえる「乳白色の裸婦」の代表作が一堂に会するだけでなく初来日となる作品やこれまで紹介されることが少なかった作品も展示されるなど見どころが満載の展覧会です。「戦後日本画壇に裏切られ、傷心にて渡仏……」

## 私の本棚 おすすめの一冊 粉川 剛

### 《トランプ台頭の秘密 / 江崎道朗著》

中間選挙間近トランプを選んだアメリカの今②サンクチュアリシティ(聖域の町)という言葉をご存知であろうか?米には不法移民を保護している自治体が300以上もある。そこでは連邦法が実質的に適用されず極左活動家や犯罪者の温床にもなっている。「聖域の町」では不法移民であつても基本的な人権を侵してはならないとの方針から各種公共サービスを受けさせている。現状を憂慮した米トランプ大統領の「聖域の町」への補助金停止の大統領令は連邦地裁に差し止められた。将来「聖域の町」の不法移民が合法化されれば票になると考える政治家もいる。我国では空前の人手不足と少子化対策で積極的に移民を受け入れるべきとの意見がある。技能実習生は実質的に移民であり、彼らを移民とするならば日本はすでに世界有数の移民大国である。安易な受け入れは「聖域の町」の誕生を招きかねない。充分な議論と対策が必要である。

## 土口哲光和尚の説法

### 《じゃんけんほい(ぼん)》

人との対話には、そつと肩を抱いたり、目と目を見合わせて言語に寄りかからないふれあいがある。時にはその方が信頼感や心の通いを強く生む場合がある。幼い頃から誰にでも通じて、かけ声と僅かの動作での「じゃんけんほい(ぼん)」は、最たる対話の遊びである。中国から7世紀頃、仏教のお経と共に伝わり、子供達を中心に全国的に広がる。語源は「料簡法意」と読む。料簡は「考えめぐらすこと」、法意は「仏の心」をいう。じゃんけんは、掌を握つて石、開いて紙、人指し指と中指2本を出して鉄みとする。一つに勝つ一つには負ける。同じ時にはあいこで中間、どちらにも偏らない中道。言語少なく公平無私の勝負に「ぐう・ちよき・ばあ」と齢を問わず楽しめる。

## 季節の家庭料理 田村 真紀

### 《十月 キンパ (韓国風海苔巻)》

韓国出身の友人に教えてもらったレシピです。

《作り方・四人分》  
米二合(固めに炊いてごま油大匙一・塩小匙一を混ぜる)・焼海苔(全形)四枚・卵二個(塩少々を加え卵焼きを作り棒状に四分分する)・ポールウィンナー四本・たくあん(棒状に切つたもの)四本・カニカマ八本・人参半本(細切りにしゴマ油大匙一で炒め塩少々・水大匙一を加え、蓋をし柔らかくなるまで蒸煮する)・ほうれん草四枚(茹でて水気を絞り4×5センチに切り塩・ゴマ油少々で味付けする) 卷すに海苔を載せ、奥三センチほど空けてご飯を薄く広げる。ご飯の中心に具材を横長に並べ手前から巻き、巻き終わりを下にしながら白煎りごまを飾る。一本を八等分に切り、切り口に白煎りごまを飾る。

## つれづれの記 山崎 辰巳

### 《体育会系の功罪》

かつて上り調子の経済成長時代、企業は好んで体育会系の学生を採用してきた。上下関係をわきままえ、元気でノリが良く、それなりの団体生活も経験済み。多少の酷使にも耐えて頑張ってくれる、という訳で重宝がられ、経済成長を体現し、支えてきた、と思われていた。しかし本当に彼らは企業の戦力として貢献してきたのだろうか? 昨今のスポーツ界のパワハラやルールを逸脱した不祥事の数々を見るにつけ、その組織風土と指導者たちには大いに疑問を感じる。企業に限らず政・官界、スポーツ界においても大切なのは、社会の一員としての社会への影響を考え、周囲を洞察し、将来を見すえる正しい想像力ではないだろうか?